

活動報告

連続教育シンポジウム「学校と地域社会」を開催して

別府大学短期大学部教授 篠藤 明德

はじめに

昨年、別府大学地域社会研究センターは、財団法人大分県青少年会館との共催で、連続教育シンポジウム「学校と地域社会」を4回にわたって開催した。その内容は既にセンターのニューズレターで報告してきたが、本稿では、その報告を再収しつつ、開催のきっかけ、終了後の反省点などを述べる。ただし、本稿はあくまでも、その企画、運営に関わった当事者の一人である筆者の個人的見解であることをまずお断りしたい。

1、企画のきっかけ

この連続シンポジウムは、大分県青少年会館の常務理事である板井泉一氏と大分県少年の船の会会長奥田聡氏と筆者の3人で主に企画してきた。板井氏は、大分県連合青年団の団長経験者で、県の社会教育団体連絡協議会の事務局長を務めるなど、専ら社会教育分野において活躍してきた人間である。氏によると、学校教育を受けていた時はどちらかという外にはみ出していた「不良」であったという。しかし、社会に出て勤め始め、また、青年団活動を通じて「地域づくり」などに取り組むことで、「本当の勉強」ができたという実感を持つ。一方、奥田氏は、現在、大在中学校で教鞭を取る学校教員である。しかし、長年にわたりボーイスカウトのメンバー、指導者として社会教育にも関わってきた変わり種である。筆者は、短大に勤務する教員であるが、16年のドイツ時代は自営業者として会社を経営してきた。これら経歴も職種も全く異なる3人が、今回の連続シンポジウムの仕掛け人である。

私たち3人には、今日学校を取り巻く問題は、社会の一機関としての学校だけの問題ではないこと、教育は学校内だけで行われるものではないこと、学校の問題は地域社会全体の問題であり、それゆえ、全員が責任を持ち関わるべきであるという漠然とした共通認識があった。しかし、学校を取り巻く問題とは、その実態は、社会の責任とは何か、という具体的なことを考え始めると、はたと困ってしまった。教育問題といっても、それぞれが漠然とした印象を持っているに過ぎず、3人の間でも意見の隔たりははなはだしいということが分かったためである。そこで、あまり気張らずに、ザックバランな討論の場を作ろうということになり、このシンポがスタートした。こうした気持ちは、一昨年度実施した読売新聞との公開講座「別府湾」の経験に学ぶことが大きかった。シンポは人集めのイベントではなく、ヒトとの出会いの場、新しいネットワークの始まりと意義付け、少人数

のフランクな討論の場を作ってきた経験である。

2、連続シンポジウムの概要

4回のシンポの内容は、ニュースレターで報告したが、その概要は以下の通りである。

・第1回「不登校を考える」(1999年3月27日)

シンポジウムではまず、三重町社会福祉事務所福祉課長の薬師寺和光氏から、問題提起があった。同氏は、不登校その他で悩む生徒に長く接してきた。その体験に基づく話は説得力があり、また、元々音楽を専門にしてきた氏の柔軟な思考は、話の糸口を作る意味で大変役立った。

不登校は小中学校だけで大分県でも1200人近く、全国では10万人いる。この背景には、急激な社会変化、それに伴う家庭の変化があるが、ともすれば、「多数が善で少数は悪」という傾向が日本では強い。不登校の原因は複雑で、本人にも分からないことが多い。学校に行かないでも、子供が行ける場所と時間があり、理解できる人がいれば自己発達できると同氏は主張した。

討論会では、犯人探しは止めようということで行われたが、どうしても学校、教師に非難が傾き勝ちになる。高校生からは「意味の分からない」校則に非難が集まった。しかし、こうした学校をテーマにしたシンポジウムや討論会で、生徒、父母、教員、社会人が同じ場で議論を戦わせたことは意義あるものであった。

・第2回「ルーズソックスなぜ悪い？」(1999年6月19日)

このテーマは、第1回シンポに参加した高校生から提案された。「主体性、個性尊重」と言われる中、彼らにとって「校則」はどうも我慢ならない「不合理」なものと映るようで、一度取り上げてくれということになった。主催者としても、高校生の生の声をもっと聞きたいということもあり、このテーマに決定した。

シンポでは、まず、日出中学校教諭の堀仁一郎氏が、「今、学校は」という題で問題提起を行った。堀氏は、「校則」をめぐる行政、教師、生徒、保護者の立場や考え方を具体的に説明し、問題の絡み合いを最初に炙り出した形になり、その後の討論がしやすくなった。

どこの社会、集団でも「ルール」が存在するので、学校という社会集団にもある種の「ルール」はあってもしかるべきではないかという点は、参加者の多くが同意した。しかし、そのルールは誰が決めるのかになると、意見が分かれる。生徒の主体性だけで良いのか、教育者としての立場は、保護者の意見はどのように反映させるべきかなど、議論が沸騰した。

・第3回「学級崩壊」(1999年10月2日)

シンポではまず、「別府の教育を考える市民会議」代表の山崎兼雄氏（別府青山高校教諭）始め3人の方から、「学級崩壊」について報告を受けた。同会では、昨年8回にわたりこの問題を取り上げ、勉強会を実施してきた。

報告では、「学級崩壊」はかつての「学校の荒れ」とは違い、いわゆる「不良」の「反発・抵抗」として起こるのではなく、普通の子がなんの悪気もなく、突然立ち上がったたり、教室から出たり、騒ぎ始めたりして学級としての授業ができなくなることだとの説明があった。また、小学校とりわけ低学年で起こる現象と中学校などで起こる現象は区別する必要があるという指摘もあった。

続いての討論会では、「学級崩壊」は社会の反映だ、家庭でのしつけが問題では、いや、40人の子供を一室に閉じ込めて行う「学級経営」という考え方自体が問題だ、とさまざまな意見が出された。一方、しつけは家庭、行事は地域にという「学校のスリム化」も進行しているという。子供の孤立化だけではなく、教員同士のつながりも希薄になっているのではないかという指摘もあった。

・第4回「地域社会の役割」99年12月4日

シンポジウムではまず、「少年の船に乗って」と題し、本シンポの企画者でもあり、現在大分県少年の船の会会長を務める奥田聡氏が、同事業の説明をしつつ、社会教育団体が学校に望むものは何か、学校教育に関わる立場で学校が地域社会に願うものは何か、との問題提起を行った。学校側からすると、「地域社会の声」というものが、ともすれば学校の事情を全く無視した要望と感ずることも多いという。しかし、少年の船などの学校外の活動は、学年、クラス制などを離れ、一緒に寝泊まりし、たくさんの生徒が純粋な感動に触れることが多いと、奥田氏は体験を交えて話した。

次に、別府商工会議所青年部前会長の木村志朗氏が、「町づくりと青少年」というテーマで問題提起を行った。同青年部は約120名の若手商工業者が集まり、話し方など社会のマナーから経営の改善など、幅広く互いに研鑽している。また、まちづくりのため6000人の子供を対象にアンケート調査を実施したり、ウィーン音大教授であるクトロヴァッツ兄弟のピアノ・コンサートを行うなど、町おこしの中心的活動を展開している。実際の仕事では、学歴などはあまり関係なく、生きた人間関係がより大切であり、目標を持ち実行すること、責任を持つことなどが重要であると語った。

討論会では、海洋少年団、青年団など社会教育に携わる出席者も含め、活発な議論が展開された。教師は事務処理からしつけまであまりに忙しく社会活動ができない、ボーイスカウトなど社会教育活動を託児所代わりに思っている親もいるという意見も出された。また、週休2日に実施や総合学習の始まりなどは、社会教育にとって追い風であるという声もある。空き教室を公民館でのカルチャーセンターの場として活用するなど、地域社会に開かれた学校施設のあり方も検討すべきであろう。

3、総括

4回にわたるシンポジウムが終了し、振り返ってみるといくつかの反省点がある。以下、思いつくままに列挙してみたい。

- ・教育の問題を学校内の問題としてではなく、地域社会の問題として捉えようと試みたことは意義があった。財団法人大分県青少年会館という学校外の機関を利用し、学校関係者のみならず、一般の人も参加した討論は、意見のまとまりは生まないまでも、互いの事情、意見を知り合う場となり、これからの取り組みのきっかけになったのではないか。
- ・学校問題を論ずる時、ともすれば当事者である生徒の意見は無視されることが多い。多くのシンポジウムでは、いわゆる有識者などの評論的、総括的意見に終始する。今回は企画段階から、そういうものは止めようとの合意があり、極力、当事者である生徒の意見が出やすい環境を作ろうと努力した。その現われが第2回の「ルーズソックスなぜ悪い？」であったが、そもそもシンポジウムという形態自体が、生徒の本音を聞くという点で、あまりふさわしくないのではという疑問が企画メンバーに起こってきた。どうしても理屈に傾きがちな筆者と違い、社会教育の現場に携わる板井、奥田氏からのこうした指摘は有難かった。そこで、昨年1年は当初の予定通りシンポの形式でやるが、今年からキャンプなど体験型の企画を考えようということになった。
- ・連続シンポで取り上げられた問題は、それぞれ今日の社会において重要な問題である。これまでシンポの内容を、センターのニューズレターで報告してきたが、本来であれば、記録を纏め、報告書などを作るべきだと思われる。準備その他で忙殺され、そこまでの結果が出せず、企画者としての力量不足、怠慢を痛感した。これからは記録を取ることをもっと充実したい。
- ・実は企画者として、地域社会と学校の協力モデルとしては具体的に何があるのかという提言を最後に行いたいと考えていた。しかし、話がそこまで煮詰まらず、総論的展開となったことは残念である。教育論議では、往々にして原因究明に大体時間が取られ、解決策作りとなると抽象的なまま終わることが多い。具体的解決策をともに探すことで、相互信頼が創造されるのではないか。そうした建設的プロセスを大切にしたい。大分県におけるモデル作り、活動作りはこれからの課題である。

おわりに

このシンポジウムを通して、地域社会でさまざまな活動に取り組む多くの団体、人々と出会えた。これが最大の収穫である。一昨年、読売新聞社と7回にわたって開催した公開講座「別府湾」でもそうだが、地域社会には隠れた「元気モン」が多い。「元気モン」と出会っていると、こちらも元気になり、何かやれそうな気になってくる。世の中の暗さがウソのようである。

企画者として、1年間とも仕事をした板井、奥田両氏も「元気モン」である。通常の仕事を抱えながら、ボランティア活動に生きがいを感じる両氏から、実体験に基づく多くのことを教えて頂いた。これからもこうしたつながりを育てていきたい。